沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第23集

新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査

2004年（平成16）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は平成13～15年度にかけて、文化庁の補助を得て沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査の概要をまとめたものであります。本調査は、平成12年度に選定された新石垣空港予定地であるカラ岳陸上案周辺の埋蔵文化財分布状況を把握するために行いました。

新石垣空港建設予定地は、当初は主に白保沿岸海域の埋め立てによる海上案でしたが、サンゴ礁などの自然環境への配慮から海岸を半分埋め立てるカラ岳海上案となり、この範囲にかかる海岸地帯について平成元年～３年度に沖縄県教育委員会が遺跡分布調査を行い平成４年３月に調査報告書を刊行しました。

その後、平成12年度にカラ岳陸上案が確定したことから、この新空港建設予定地において当センターが再度遺跡分布調査を実施したわけであります。

今回の調査により、新空港建設予定地内および周辺の埋蔵文化財の分布状況を明らかにすることができました。現在石垣島ゴルフ場となっている地域の東側緑地においては、今回新たに岩陰を利用した近代の古墓を確認しました。また、従来から知られているアブ遺跡については、その範囲、性格、時期等は不明でしたが、今回の試掘調査により歴史時代の中森期とされる14・15世紀まで遡る集落跡の可能性が想定できました。また、無土器期の貝塚である嘉良嶽東貝塚は以前から周知されており、先の平成４年の調査報告書においてすでにその性格や範囲を明らかにしております。

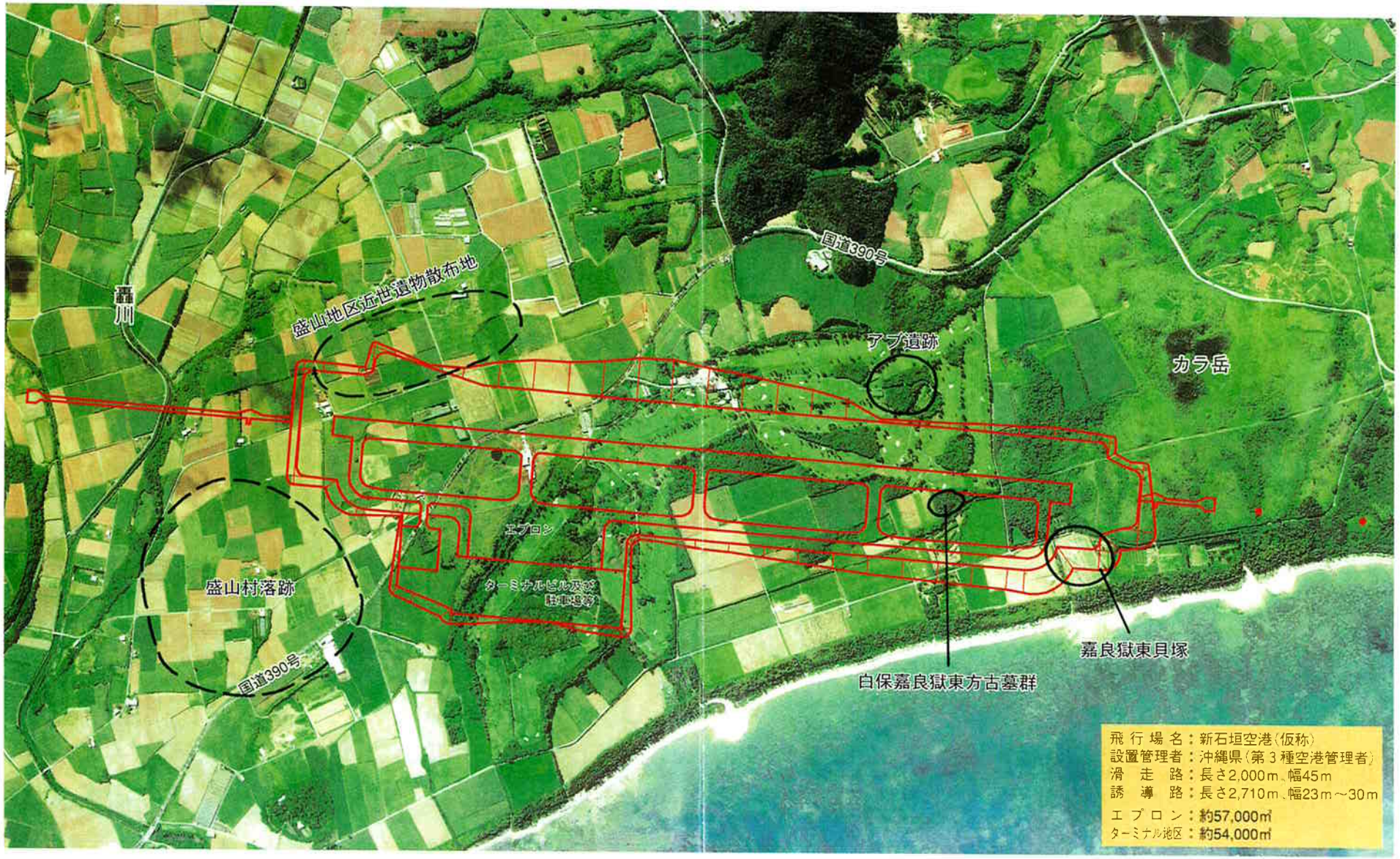
しかしながら、ゴルフ場内のフェアウエイなどにおいては、現在稼働中であるため十分な調査はできませんでした。この範囲については、実際の空港建設においてあらためて遺跡分布調査を実施する必要があります。

本報告書が、新石垣空港建設事業の実施にあたって、ここに明らかにされた遺跡を円滑に取り扱うための検討資料として有効に活用されるとともに、今後の埋蔵文化財の適切な保存と活用を図るための基礎資料に資することにつながれば幸いであります。さらに、研究、教育、生涯学習等の資料として広く多くの方々に活用され、沖縄の歴史と文化への理解と関心が深まることを期待しております。

末尾ながら、調査の実施にあたって適切なご指導・ご助言・ご協力を頂いた県八重山支庁、石垣市教育委員会ほか関係諸機関各位に対し、心から感謝申しあげます。

2004年（平成16）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　安里　嗣淳



巻頭図版１　新石垣空港予定地内遺跡

カラ岳遠景（南から）

白保嘉良嶽東方古墓群（写真中央のブッシュ地帯　東から）

巻頭図版 2

白保嘉良獄東方古墓群・墓１（東から）

白保嘉良獄東方古墓群・墓２（東から）

巻頭図版３

白保嘉良獄東方古墓群・墓３（東から）

石垣島ゴルフ場16番ホール北側ブッシュ１号壕（南から）

石垣島ゴルフ場９番ホール北側・アブ遺跡遠景（南から）

アブ遺跡内試掘トレンチ26黒褐色土検出状況（西から）

巻頭図版５

嘉良嶽東貝塚遺物包含層残存地・白保嘉良嶽1960－175（東から）

白保嘉良嶽1960－173番地試掘地点堆積状況

巻頭図版 6

盛山村落跡南側周辺（北から）

盛山村落跡北側周辺（南から）

巻頭図版７

盛山御嶽遠景（東から）

盛山御嶽ブッシュ内巨石（南から）

巻頭図版８

例　　言

1．本報告書は、平成13～15年度にわたって、文化庁の補助を受け、沖縄県教育委員会の指導を元に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査の概要を記したものである。

2．現地調査にあたっては、沖縄県土木部新石垣空港建設対策室・八重山支庁新石垣空港建設課・石垣市教育委員会の協力を得た。

3．本書に掲載した地図は、国土地理院発行1/2,500と、八重山支庁から提供を受けた空港建設に伴う測量図を使用している。

4．図版３に使用した盛山村絵図の掲載にあたっては、社団法人温故学会の御厚意により許可を頂いた。

5．本書の執筆・編集は、瀬戸哲也が行った。

6．現地調査で得られた遺物および実測図・写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管されている。

7．現地調査・資料整理などの調査体制については、第１章第２節に記した。

8．本書では、金武正紀・阿利直治・金城亀信（金武1994）の編年試案に従って、時期の表記を行った。

報告書抄録

ふりがな	しんいしがきくうこうよていちないいせきしょうさいぶんぷちょうさ
書名	新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査
副書名	－
巻次	－
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	瀬戸哲也
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の７
発行年月日	2004年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
新石垣空港予定地内の分布調査	沖縄県　石垣市 白保・盛山	472077 石垣市		24° 23～24′	124° 15′	2001.6.25 ～ 2003.12.20		新石垣空港予定地内に所在する埋蔵文化財の分布状況を把握するため

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嘉良嶽東貝塚	貝塚	先史時代・無土器期～歴史時代・新里村期	なし	土器・石材・類須恵器(全て表採)	試掘調査では遺物包含層確認できず。
アブ遺跡	集落跡・遺物包含層	歴史時代・新里村期～近世	なし	白磁・褐釉陶器・土器・貝	試掘調査により遺物包含層を確認した。
盛山村落跡	集落跡・遺物散布地	近世	なし	沖縄産陶器(全て表採)	試掘調査では遺物包含層確認できず。
白保嘉良嶽東方古墓群	墓地跡	近世～近代	岩陰墓	厨子甕・人骨	岩陰墓を３基確認。２基は厨子甕に骨が納められていた。本調査は行っていない。

目　次

序
巻頭図版
例　言
報告書抄録

第１章　調査に至る経緯……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査体制……1
第３節　調査経過……2

第２章　位置と環境……6
第１節　新空港予定地の位置……6
第２節　新空港予定地内及び周辺の遺跡……6

第３章　調査の概要……9
第１節　嘉良嶽東貝塚……9
第２節　嘉良嶽東方古墓群……11
第３節　アブ遺跡……12
第４節　盛山村落跡・盛山地区近世遺物散布地・盛山御嶽……16
第５節　カラ岳周辺……16
第６節　石垣島ゴルフ場内洞穴および人工壕……16

第４章　結語……19

図　目　次

第１図　沖縄本島の位置……4
第２図　石垣島と新空港予定地の位置……5
第３図　新石垣空港予定地内及び周辺の遺跡……7
第４図　嘉良嶽東貝塚周辺……10
第５図　嘉良嶽東貝塚周辺採集遺物……11
第６図　アブ遺跡周辺……13
第７図　アブ遺跡試掘位置……14
第８図　アブ遺跡試掘出土遺物……15
第９図　盛山村落跡周辺……17

図　版　目　次

巻頭図版１　新石垣空港予定地内遺跡
巻頭図版２　上：カラ岳遠景（南から）
　　下：白保嘉良嶽東方古墓群（写真中央のブッシュ地帯　東から）
巻頭図版３　上：白保嘉良嶽東方古墓群・墓１（東から）
　　下：白保嘉良嶽東方古墓群・墓２（東から）
巻頭図版４　上：白保嘉良嶽東方古墓群・墓３（東から）
　　下：石垣島ゴルフ場16番ホール北側ブッシュ１号壕（南から）
巻頭図版５　上：石垣島ゴルフ場９番ホール北側・アブ遺跡遠景（南から）
　　下：アブ遺跡内試掘トレンチ26黒褐色土検出状況（西から）
巻頭図版６　上：嘉良嶽東貝塚遺物包含層残存地・白保嘉良嶽1960－175（東から）
　　下：白保嘉良嶽1960－173番地試掘地点堆積状況
巻頭図版７　上：盛山村落跡南側周辺（北から）
　　下：盛山村落跡北側周辺（南から）
巻頭図版８　上：盛山御嶽遠景（東から）
　　下：盛山御嶽ブッシュ内巨石（南から）

図版１　嘉良嶽東貝塚周辺採集遺物……11
図版２　アブ遺跡試掘出土遺物……15
図版３　盛山村絵図……18

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄県は161の島で構成される島嶼県であり、航空路線は各島々をむすび住民にとって欠かすことのできない重要な交通手段の一つである。

その中でも、八重山諸島の重要な空港である石垣空港は、非常に利用率の高い空港である。現在、旺盛な航空需要に対応するため、新空港ができるまでの間として、現空港（滑走路長1,500m）を暫定ジェット化空港とし、B－737型機等が就航している。

現空港の北側には国指定のフルスト原遺跡があること、南側は市街地化が進展しており、現空港の拡張には用地の確保、建物等の移転、騒音対策等の問題がある。そのため、周辺住民から現空港拡張の強い反対があり新たな場所での新空港の早期建設・移転が県や市に要請されている。

当初は、白保地先の海岸を埋め立てて空港建設を行う予定であったが、サンゴ礁の保全などの自然環境への配慮から計画を断念した。その後、1989年には海岸を半分埋め立てるカラ岳海上案が採択され、沖縄県教育員会が、予定地内の文化財分布調査を行った（沖縄県教育委員会1992）。

平成３年から空港建設予定地の再検討が始まり、幾度も予定地の変更があった。そういった中で、2000年にカラ岳陸上案が選定され、2001年にはさらに具体的な位置を検討することになり、約180m南側へ移動し、ターミナル位置を東側にした案に決定した。

この予定地案は、1989～91年度に渡って分布調査を行ったカラ岳海上案の予定地範囲よりも、全体的に北西側に約２kmずらした範囲であるため、再度この範囲の遺跡詳細分布調査が必要となった。そこで、沖縄県教育委員会が予定地内の文化財の適切な保存を図る目的で、2001～03年度に渡って新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査を行うこととした。この事業の現地調査および資料整理・報告書作成は県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが行うことになった。

第２節　調査体制

今回の事業は、文化庁からの補助を受け沖縄県教育委員会が主体となって実施した。調査は沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となり、調査員はセンター専門員があたり、現地調査・資料整理にあたっては文化財嘱託調査員および賃金職員を雇用して行った。また、沖縄県庁土木部新石垣空港建設対策室、八重山支庁新石垣空港建設課、石垣市教育委員会等の関係者からの協力を随時得ることができた。

平成13年度から平成15年度の分布調査から資料整理および報告書刊行までの調査体制は、下記のとおり実施した。

2001年度（平成13）の調査体制

調査主体　　沖縄県教育委員会

津嘉山朝祥（教育長）

當眞嗣一（文化課課長）、大城　慧（課長補佐）、盛本　勲（記念物係長）、仲座久宜（記念物係専門員）

調査所管　　沖縄県立埋蔵文化財センター

知念　勇（所長）

調査事務　知念廣義（副所長兼庶務課課長）、上原　浩・城間千賀（庶務課主事）

調査総括　島袋　洋（調査課課長）

調査員　　安座間　充（調査課専門員）

調査補助員　藤崎　京・片桐千亜紀・知念政樹（文化財調査嘱託員）

資料整理作業員　玉城照美・玉城恵美利

2002年度（平成14）の調査体制

調査主体　　沖縄県教育委員会

津嘉山朝祥（教育長）

日越国昭　（文化課課長）、大城　慧（課長補佐）、島袋　洋（記念物係長）、岸本義彦（記念物係主任専

門員）
調査所管　　沖縄県立埋蔵文化財センター
安里嗣淳　（所長）
調査事務　安冨祖　英紀（副所長兼庶務課課長）、西江幸枝（庶務課主任）、城間千賀（同課主事）
調査総括　盛本　勲（調査課課長）
調査員　　西銘　章（調査課充指導主事）、川元哲哉（同課主事）、瀬戸哲也・片桐千亜紀（同課専門員）
調査補助員　青山奈緒・天久朝海・松永洋平・宮城奈緒・岸本竹美・喜多亮輔・仲宗根瑞香（文化財調査嘱託員）
発掘調査作業員　上野善仁・西表美智・新垣順一・伊藤　圭
資料整理作業員　金城恵子

2003年度（平成15）の調査体制
調査主体　　沖縄県教育委員会
山内　彰（教育長）
日越国昭（文化課課長）、大城　慧（同課長補佐）、島袋　洋（記念物係長）、中山　晋（記念物係専門員）
調査所管　　沖縄県立埋蔵文化財センター
安里嗣淳（所長）
調査事務　安冨祖英紀（副所長兼庶務課課長）、比嘉美佐子（庶務課主査）、西江幸枝（同課主任）
調査総括　盛本　勲（調査課課長）
調査員　　瀬戸哲也・片桐千亜紀（調査課専門員）、崎原恒寿（臨時的任用専門員）
調査補助員　新垣　力・宮城奈緒・山田浩久・伊波直樹・金城　達・久貝弥嗣・喜多亮輔・天久朝海（文化財調査嘱託員）
発掘調査作業員　上野善仁・新垣順一・上野好子
資料整理作業員　城間まさみ・知念咲希・譜久里昌代
資料整理協力者　又吉純子・平良貴子・比嘉孝子・比嘉登美子・荻堂さやか・譜久村泰子
調査指導・協力
下地　傑・石垣市教育委員会
島袋綾野・石垣市総務部市史編纂課
沖縄県土木部新石垣空港建設対策室
森田　敦・沖縄県八重山支庁新石垣空港建設課

第３節　調査経過

調査は、平成13年度～平成14年度にわたって行った。現在、空港予定地内一帯は、畑地や牧草地であるところも多いので、農閑期の間に調査を行う必要があるため、調査期間を１年の内２・３回に分けた。

平成13年度

本年度は５・６月に調整を行い、調査を１回目が６月25日～７月６日、２回目が11月19日～30日、３回目が３月11日～20日の３次にわたって行った。

調査は、原野・牧場を除いた石垣島ゴルフ場および畑地の表面踏査を行った。その踏査では、嘉良岳東貝塚に隣接する畑地である白保嘉良嶽1960－173周辺で、八重山式土器および石材・貝類が多数散在していることが分った。その成果を受け、この場所で重機による試掘を行ったが、遺物包含層および遺構の存在は認めなかった。また、盛山地区では近世陶磁器の散在が見られる場所があり、予定地南東に位置すると伝えられる盛山村落跡のつながりが考えられるため、試掘の必要性があることを確認した。ゴルフ場内では、それほど改変が及んでいないと思われるブッシュ地帯がいくつかあり、その中に数基の洞穴および石積が確認できた。

平成14年度

本年度は５・６月に調整を行い、調査を１回目が７月８日～19日、２回目が12月２日～20日、３回目が２月24日～３月14日にわたって行った。

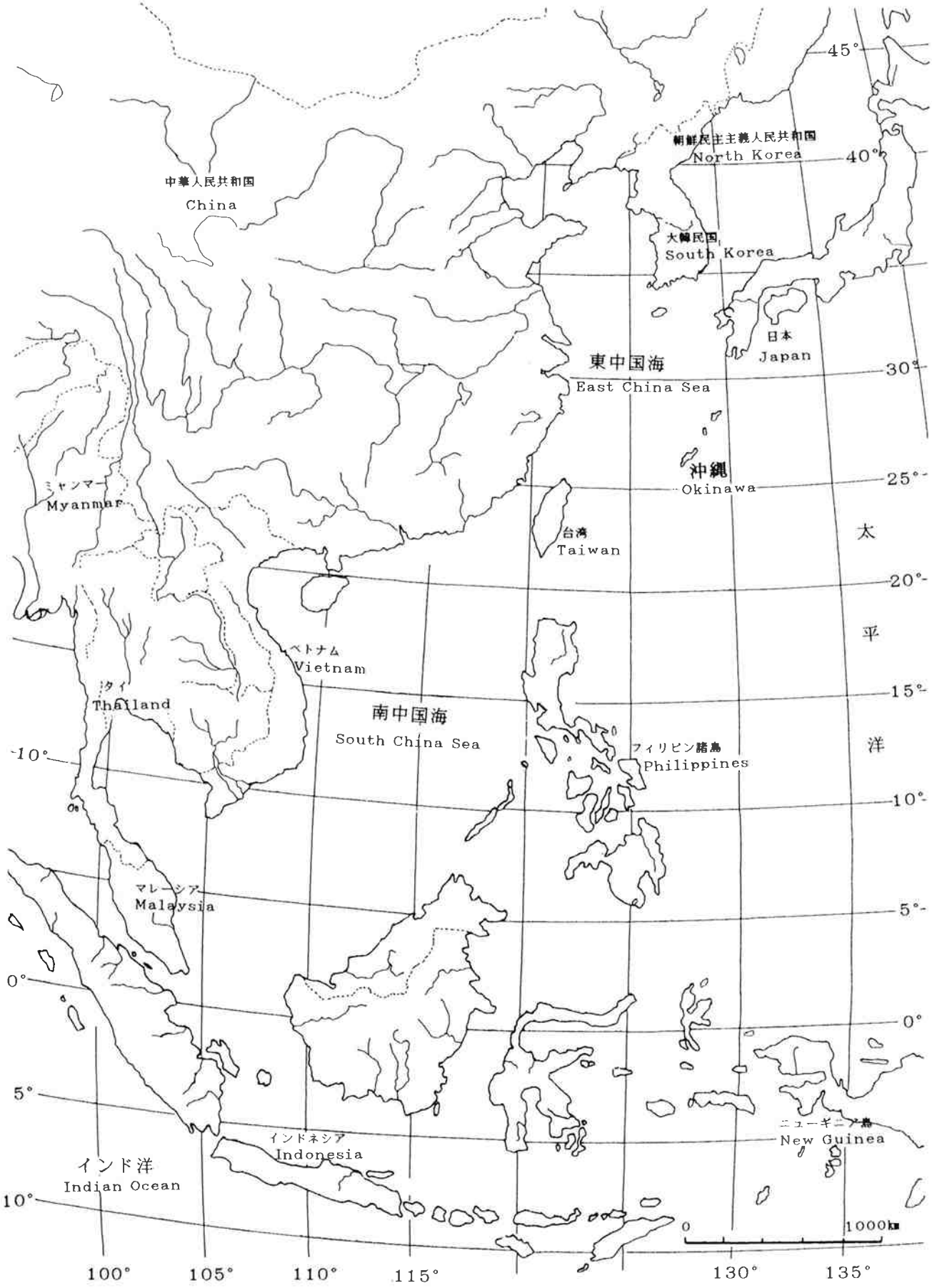
調査は前年度表面踏査が及ばなかった範囲を中心に、石垣島ゴルフ場内のブッシュ地帯等の踏査に時間がかかる場所の再確認を含めて、表面踏査を行った。その結果、ゴルフ場内のブッシュ地帯で古墓３基、戦時のものと思われる人工壕２基を新たに確認した。また、カラ岳周辺でも表面踏査を行ったが、その山頂で爆弾穴と思われる凹みを４基確認したのみで、空港予定地内では新たな文化財の確認はなかった。試掘調査は、前年度にも行った嘉良岳東貝塚に隣接する畑地である白保嘉良嶽1960－74で行ったが、採砂工事により削平を受けており、旧地表さえ残存していなかった。また、近世遺物が散在する盛山地区にて、盛山西種子175－48で試掘調査を行ったが、遺構・遺物包含層は確認できなかった。

平成15年度

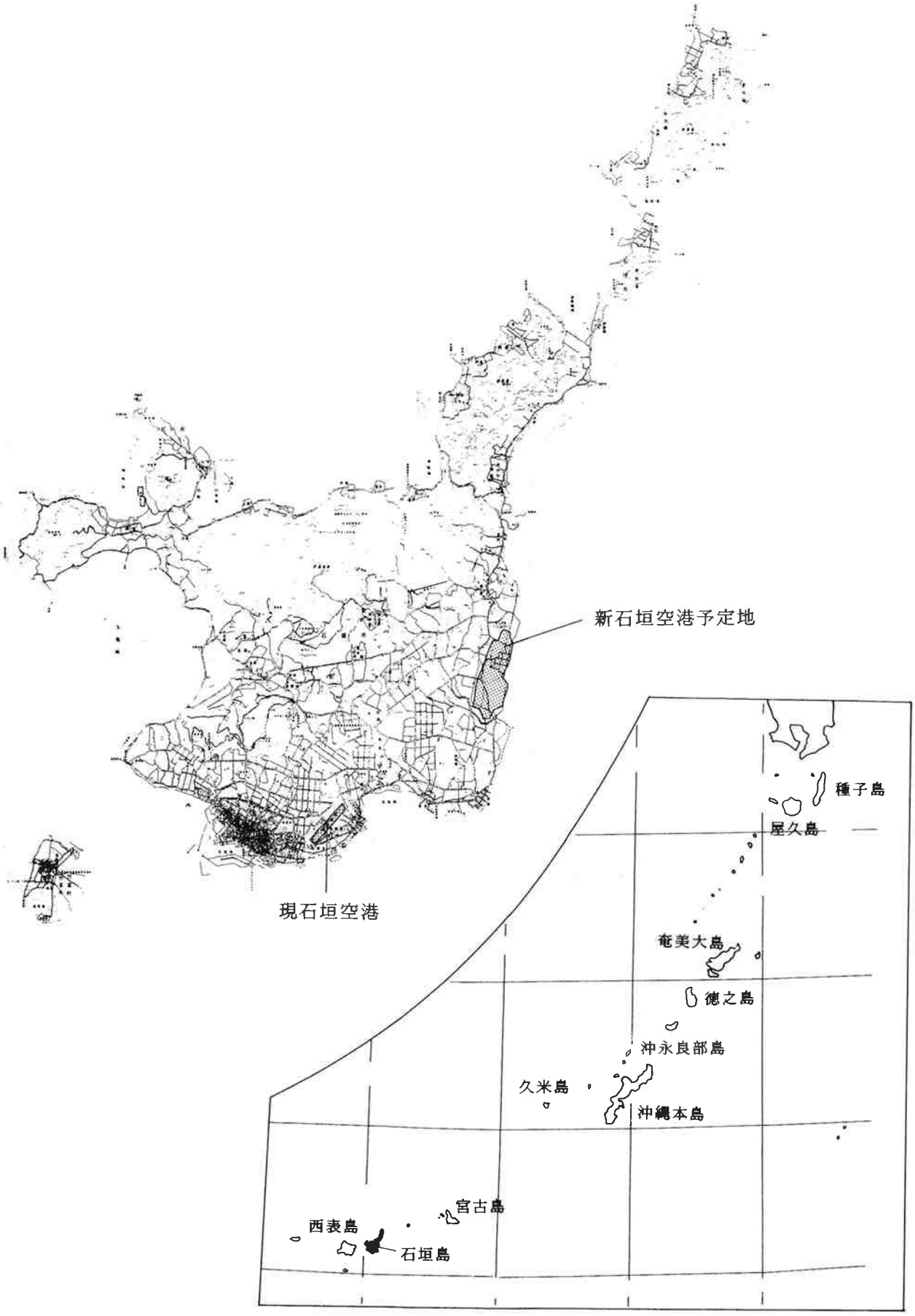
本年度は４・５月に調整を行い、調査を１回目が６月９日～20日、２回目が12月８日～20日にわたって行った。

調査は、ゴルフ場内ブッシュの試掘調査を中心に行った。ゴルフ場内ブッシュは、基本的に岩盤が露出しているところが多いが、10番ホール東側においては土の堆積が見られたため、手掘による試掘調査を12ヶ所行ったが、遺物包含層・遺構は確認出来なかった。８番ホール北側のアブ遺跡とされている範囲では、14ヶ所の手掘よる試掘を行った結果、２ヶ所で白磁・褐釉陶器・土器を含む黒褐色土を確認した。この範囲自体は、予定地外ではあるが極めて隣接しているので、現在ゴルフ場のフェアウエイ・グリーンになっている範囲に及んでいる可能性も考えられ、注意を要する。同様に予定地外であるが、盛山御嶽とされている範囲で簡単な伐採を行い踏査したが、特に人為的な痕跡は見つけることは出来なかった。

一方、最終年度であるため、現地調査と併行して遺物整理および報告書作成の作業も行い、年度末に報告書を刊行した。


中華人民共和国
China
朝鮮民主主義人民共和国
North Korea
大韓民国
South Korea
日本
Japan
東中国海
East China Sea
沖縄
Okinawa
台湾
Taiwan
ミャンマー
Myanmar
ベトナム
Vietnam
タイ
Thailand
南中国海
South China Sea
フィリピン諸島
Philippines
マレーシア
Malaysia
インドネシア
Indonesia
インド洋
Indian Ocean
ニューギニア島
New Guinea
太
平
洋
45°
40°
30°
25°
20°
15°
10°
5°
0°
0
1000km
100°
105°
110°
115°
130°
135°

第１図　沖縄本島の位置



第２図　石垣島と新空港予定地の位置

第２章　位置と環境

第１節　新空港予定地の位置

新石垣空港が建設計画されている場所は、沖縄県石垣市街地の東北方約13km一帯である。

石垣島がある八重山諸島は、日本最南端で数多くの島々で構成される沖縄県においても、その最南端に位置する。八重山諸島は、この石垣島・西表島・与那国島・竹富島等、併せて大小27の島々で構成される。

石垣島は、この八重山諸島の中心で、空港・港湾が整備され、周辺の離島への定期船も頻繁に発着している。島の北部は細長く山の多い地形で、その両側の海岸側に狭い平野が地形に分散されて見られ、その部分に集落が分布する。中央部は標高525mの於茂登岳を中心とする山々が発達している。この山々を挟んだ南部には台地が見られ、さらに海岸側には広い平野が広がっている。

新石垣空港予定地は、石垣市白保、石垣島の南部寄りの東海岸側に位置し、海岸から上がった標高10～50mの段丘上に位置する。この一帯は、白保集落より国道390号線を北に約３kmいったところとなる。この予定地の現在の土地利用は、その多くはキビ等が中心に畑地、牧場もしくは牧草地となっているが、予定地の４割の広さを占めるのは石垣島ゴルフ場である。予定地からは外れるが、この石垣島ゴルフ場のすぐ北には、標高136mのカラ岳が迫っている。

第２節　新空港予定地内及び周辺の遺跡（第３図）

空港予定地内および付近に所在する遺跡は、今回の調査の成果を合わせて、次の８遺跡がある。その内、嘉良嶽東貝塚および白保嘉良嶽東方古墓群の２遺跡が予定地内に含まれることとなった。また、アブ遺跡および盛山村落跡は予定地に極めて近接する遺跡である。

1. 嘉良岳東貝塚

沖縄県教育委員会が89年度に白保1960－175番地南西側で試掘調査を行い、無土器期の遺物包含層を確認している（沖縄県教育委員会1992）。また、石垣市教育委員会が同番地北東側で92年度に採砂工事に先立って、調査を行い、おおよそ新里期（12～13世紀前後）と考えられる古手の八重山式土器が出土する包含層を確認している。今回の調査ではこの番地の南側の1960－74・173番地で試掘調査を行ったが、包含層に相当する層は確認できなかった。

2. カラ岳遺跡

カラ岳頂上より微量の青磁・白磁・褐釉陶器が採集されること、近世の史料である『八重山嶋年来記』の記録から遠見台として使用されていたことから、遺跡とされていた（沖縄県教育委員会1990・1992）。今回の調査では、山頂を抜採して踏査を行ったが、遺物の表採はできなかった。しかしながら、爆弾穴と思われる凹みおよび人為的な方形の凹みを山頂において確認した。また、２基の壕も存在している（太田2000）。

3. 白保嘉良嶽北方古墓群

沖縄県教育委員会による90年度の調査で確認した古墓群である。墓は、板石を周囲に廻らし幅約１m、長さ約２mの石棺状の構造をもつもので、３基を数える。この時期であるが、周囲から主に沖縄産陶器灰釉碗が得られており、17～18世紀代と考えられる（沖縄県教育委員会1992）。

4. 白保嘉良嶽東方古墓群

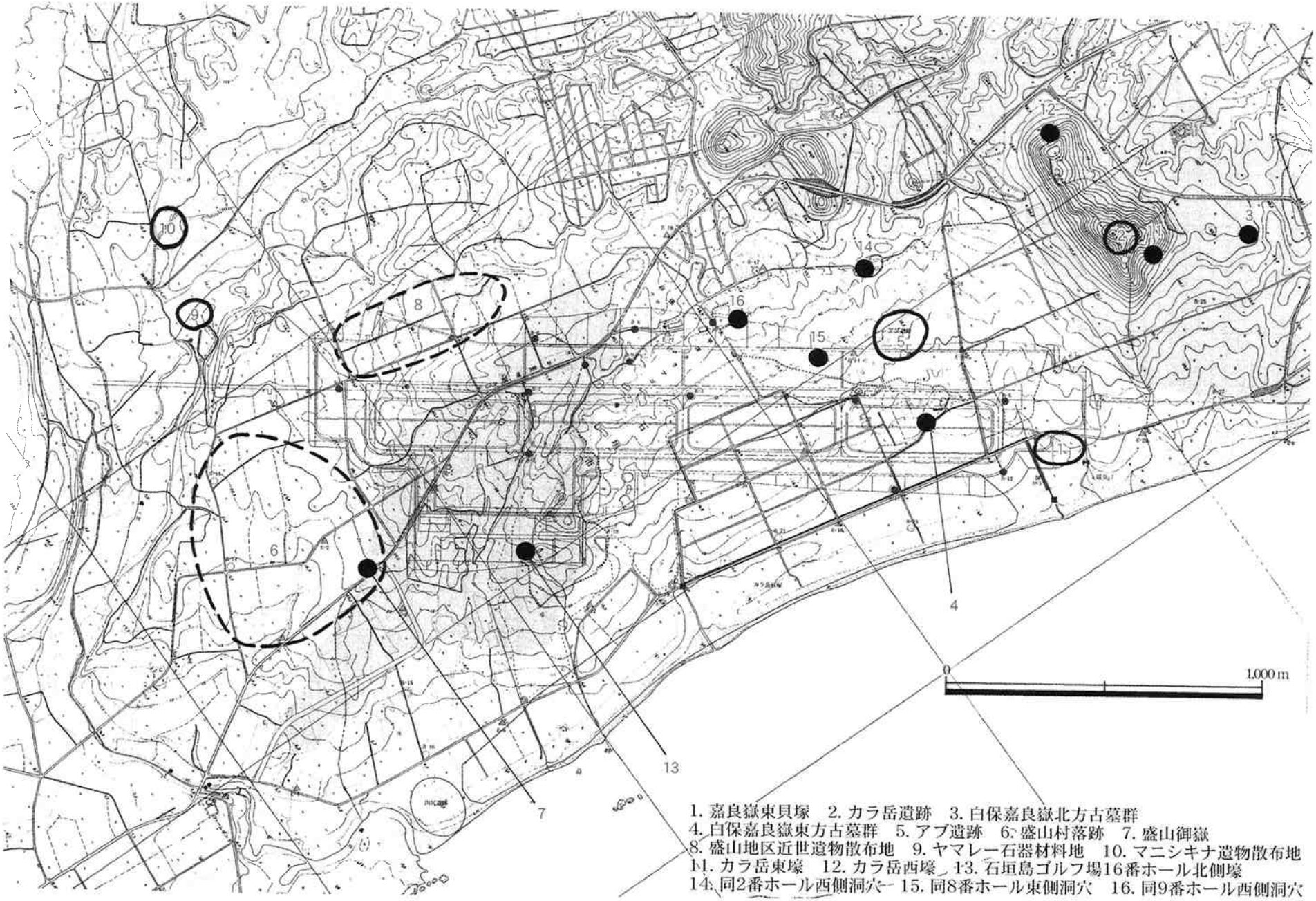
今回の調査で確認された古墓群である。岩陰を利用した墓で、現状で２基を数える。厨子甕から19世紀末から20世紀初頭の墓と思われる。現在の石垣島ゴルフ場北東端のブッシュ地帯である石灰岩の岩陰に位置する。遺跡名については、小字である白保嘉良嶽の東方にあることから、このように仮称する。

5. アブ遺跡

これまで、近世期の集落跡とされていたようである。今回の調査で、白磁・褐釉陶器・土器を包含する黒色土が一部で確認した。ただ、この黒色土の広がり、遺構については、その周辺を小規模な試掘ではあったが、確認できなかった。しかしながら、この地点には14・15世紀までに遡る集落跡等が存在していた可能性が今回の調査でより明確になったものと思われる。

6. 盛山村落跡

カラ岳の南方に所在する近世の集落跡である。記録によれば、明和大津波（1771年）のあと天明５（1785）年に村建てし、マラリア等により大正６（1917）年に廃絶したようである。



第３図　新石垣空港予定地内及び周辺の遺跡

現在は、牧草地および畑地となっており、区画整理により原地形は残存していないものとされている。残されている絵図から、現在も一部の道および井戸が残されているものと考えられる。また、周辺には19～20世紀前半代の沖縄産および本土産陶磁器・瓦等が採集できる。

7. 盛山御嶽

牧野清の著書（牧野1990）に掲載されている御嶽である。同書により、現在は信仰が絶えているが、盛山村にあったとあれる2ヶ所の内の一つだと考えられている。今回の調査では、現在森となっているこの場所の内部を伐採したところ、石灰岩盤である大きな巨石があるのを確認した。しかしながら、香炉等の遺物および人工的な痕跡は確認できなかった。

8. 盛山地区近世遺物散布地

盛山村落跡より北西約500m離れた一帯で、同時期の遺物が畑地で採集できる地点である。今回は、この地点で４ヶ所の試掘を行ったが、遺物包含層・遺構は確認できなかった。

9. ヤマレー石器材料地

轟川上流で石器の材料となった緑色片岩が散布している地点である（沖縄県教育委員会1992）。

10. マニシキナ遺物散布地

「スク（グスク）時代の遺物散布地」と記載されている一帯である（沖縄県教育委員会1992）。

第３章　調査の概要

今回の分布調査は、まず空港予定地内およびその周辺において、遺物採集および古墓・洞穴等の所在を把握するために表面踏査を行うことから始めた。そして、一部の場所では人力および重機による試掘調査を行った。これらの調査の結果、現在の予定地内において工事計画が行われるときに、明らかに記録保存等の対策をとる必要があるのは、嘉良嶽東貝塚および白保嘉良嶽東方古墓群の２遺跡である。また、現在の予定地からは外れているが、国道等の空港関連工事などで予定地周辺にも工事が及ぶ場合に対策を講じなければいけない遺跡としては、盛山村落跡周辺およびアブ遺跡である。

そのため、本章の記述はまずこれらの現在の空港予定地内および周辺で工事等が行われた場合に何らかの対策を行う必要があるところを中心に述べておくことにする。

第１節　嘉良嶽東貝塚（第４・５図）

沖縄県教育委員会が1978年度に実施した石垣島内の分布調査では、嘉良嶽貝塚として、轟川の北約700mの砂丘地に形成された無土器の遺跡であったが現在では大規模な土地改変によりその詳細な場所が確認できないとされていた（沖縄県教育委員会1978）。

また、新空港がカラ岳海上案とされていた時に行われた沖縄県教育員会による1989年度の範囲確認調査では、白保嘉良嶽1960－175番地一帯には、無土器期の遺物包含層が残存しているとし、地点貝塚として確認されている。この時の報告書では、嘉良嶽貝塚の地点貝塚として報告されており、文中ではカラ岳東貝塚という記載も見られる（沖縄県教育委員会1992）。

その後、石垣市教育員会では1992年度に採砂工事に先だって、白保嘉良嶽1960－175番地北東側の海岸沿いにある防潮林ぎわにおいて発掘調査を行っている。その結果、古手の八重山式土器が出土する新里村期（12～13世紀）の遺物包含層を確認している。

また、2001年度にも同教育委員会により1960－73番地で採砂工事に先立って採掘調査が行われたが、遺物包含層等は確認できなかった。

今回の調査は、今まで無土器期および新里村期の遺物包含層が確認できた1960－175番地の周辺においてもその広がりが見られるかが課題となった。実際、調査を始める前にも、この周辺は戦後および復帰後の採砂工事によりその多くが原地形を留めていないという話を現地で多く聞いた。この真否を確認するためにも、今回の調査でも表面採集ができた1960－173番地と同1960－74番地で重機による試掘調査を行うことにした。これらの地点は、現在畑地となっており、標高は５m前後である。

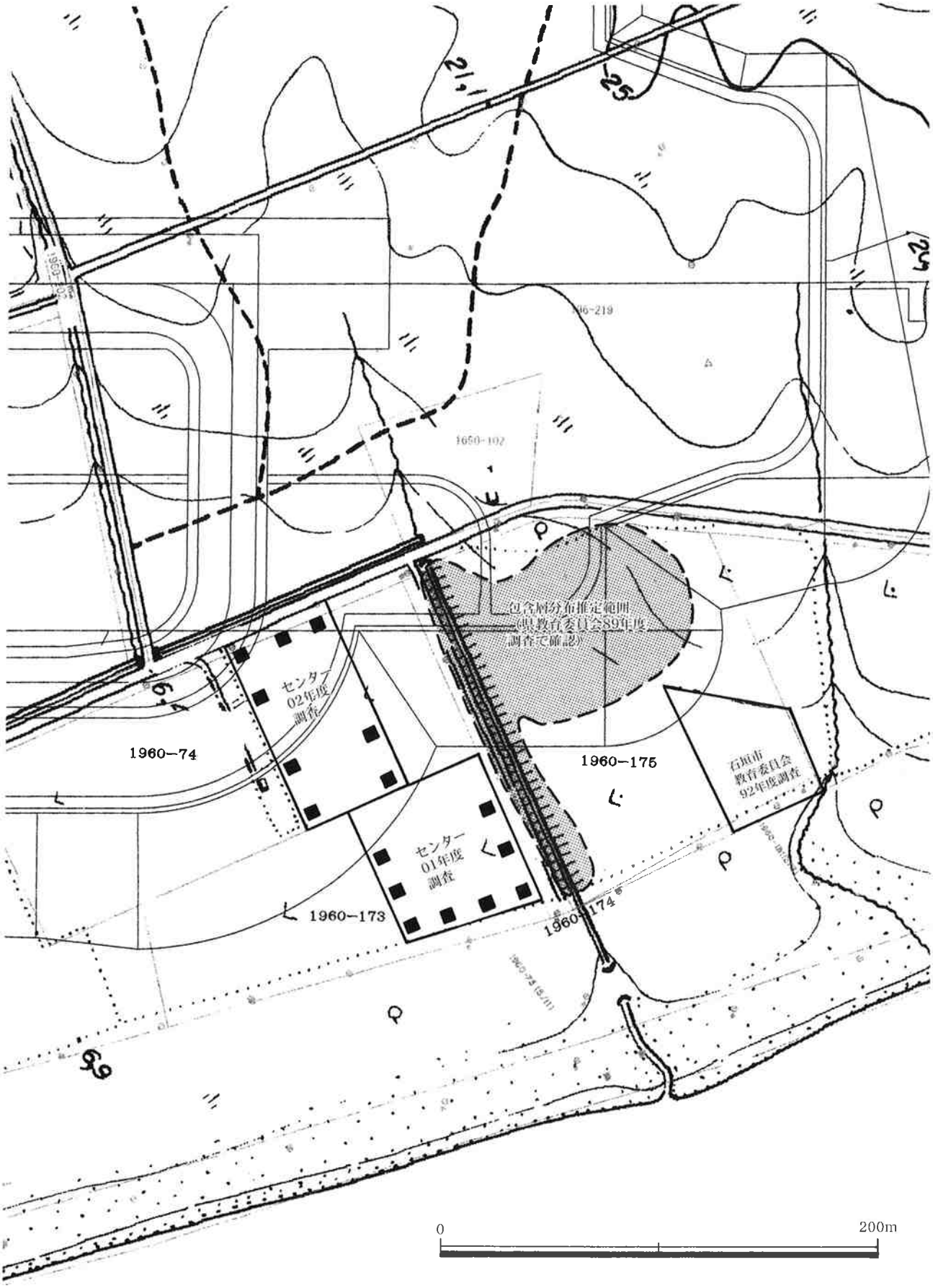
1960－173番地では、11ヶ所の試掘調査を行った。ここでは、全ての地点で厚さ0.5～1.0m前後の表土・耕作土の直下に白砂層が続いていたことを確認した。この白砂層には、サンゴ・貝等が多く混じる層の他に、おそらくその当時は地表面として機能していたと思われる腐食化した土壌化層も確認できた。しかしながら、遺物は全く出土しなかったため、ここまで遺物包含層の広がりは見られないと判断した。

1960－74番地では、９ヶ所の試掘調査を行った。ここでは、その大半の地点で地表から２～３mの厚さの盛土がなされており、採砂工事によるものと思われる。この盛土は場所により異なっており、粘板岩の巨礫が混じるシルト、サンゴ・石灰岩の礫が混じる細砂、黒褐色シルトなどがあり、それぞれ異なる場所からもたらされてきたものであろう。この盛土の下には白砂層が続くことになるが、サンゴ・貝類が混じる層とそれらが混じらない層が交互に見られる部分もある。さらに、地表下４mまで掘削した地点では石灰岩が凝結して岩盤状になっている。より海岸に近い1960－173番地では、岩盤が検出された地点はなく、海岸から離れるほど岩盤が浅いところにあると言えよう。この地点でも、遺物包含層は見られなかった。

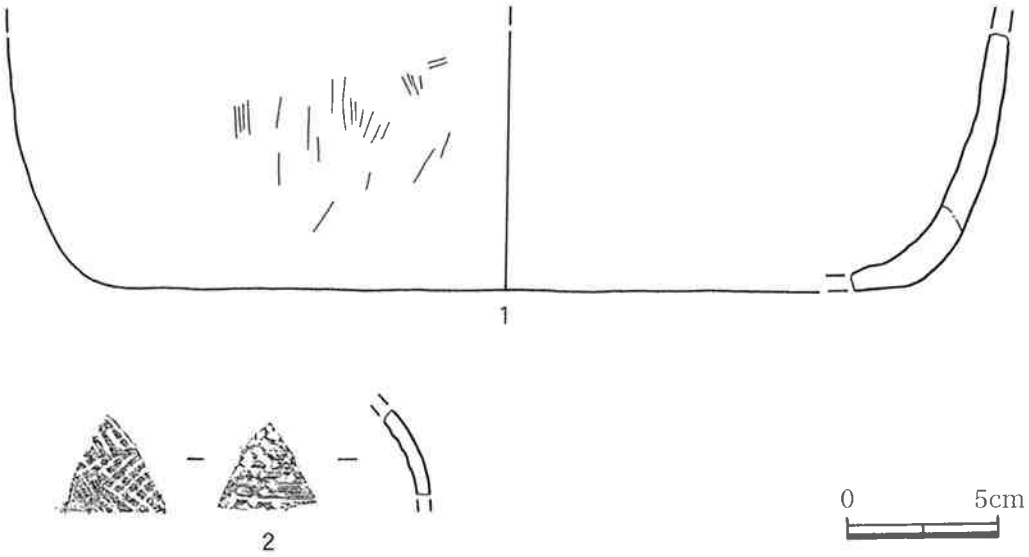
現在の遺物散布状況は、白保嘉良嶽1960－175番地を南限とし、同1960－74・1960－173番地で、八重山式土器、緑色片岩製の石斧、類須恵器、ヤコウガイの蓋等が採集できる。しかしながら、2003年現在において、1960－175番地の西側、海岸沿いへ抜ける道（1960－174番地）を除き、採砂工事により本来の地層が全て抜き取られており、遺物包含層自体は極めて残存状況は良くないと思われる。

今回の試掘調査では、遺物の出土は見られなかったが、表採によりわずかな遺物を得ることができた。この貝塚の新里村期（12～13世紀）の様相を窺うことができるので、小片だが掲載した（第５図・図版１）。

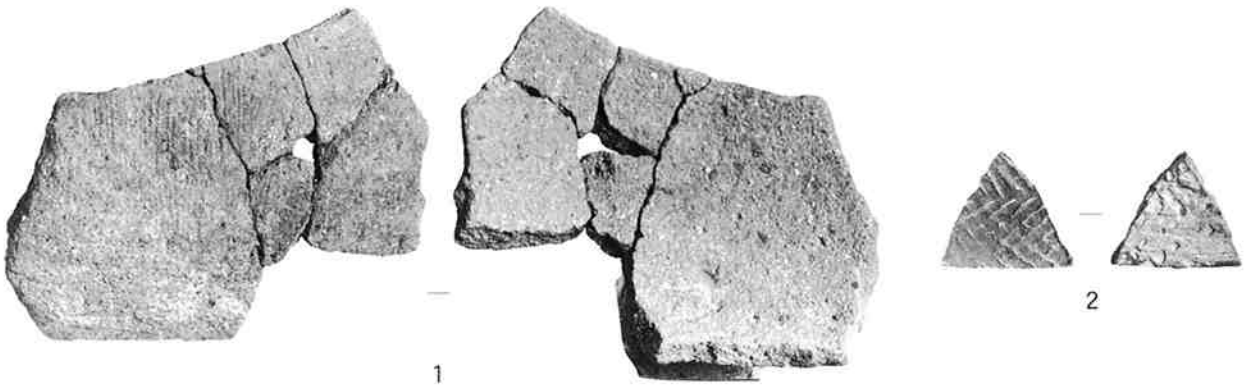
１は1960－173番地で採集した土器の底部である。底部は比較的丸みをもつタイプで、復元径24.0cm。



第４図　嘉良嶽東貝塚周辺（S=1/2,500）



第５図　嘉良嶽東貝塚周辺採集遺物　土器（1）、類須恵器（2）



図版１　嘉良嶽東貝塚周辺採集遺物

調整は外面がタテ方向のハケメ（７本／cm）の後ナデ、内面がナデである。色調は、内面・断面が橙色、外面がにぶい褐色。胎土は、１～２mm前後の貝砕片・石灰質砂粒・チャート等が50パーセントの割合で含まれる。胎土や底部の立ち上がりからは、竹富島カイジ浜貝塚のＡ群土器Ｉ類等（沖縄県教育委員会1994）、いわゆる新里村式土器（金武1994）に近い特徴をもつと思われる。

２は1960－74番地で採集した類須恵器の体部片である。焼成は良好。色調は外・内面が灰色、断面が赤褐色。調整はタタキで、外面が矢羽状、内面が格子状をなす。

以上のことから、この嘉良嶽東貝塚の遺物包含層の範囲は、1960－175番地の西側と1960－174番地の海岸へ抜ける道のみの約3,000㎡ あまりと思われる。この範囲においては、工事が及ぶならば、記録保存のための緊急調査を実施する必要がある。

第２節　嘉良嶽東方古墓群（第６図）

石垣島ゴルフ場４番ホール東側ブッシュの農道（白保嘉良嶽1960－173）沿いの岩陰で３基の古墓を確認した。この古墓はゴルフ場東端に沿ってある農道ぞいに長さ50mの岩陰を利用して造られている。この地点は標高10m付近で、ここから西側に向かって岩盤が露出し始める最初のところである。

墓１は人骨が入れられた厨子甕が３基、墓２は２基が一箇所に集められ、その部分に低い石積みがなされ

たものである。この２つの墓の厨子甕には納められている骨は、おそらく洗骨されたと思われる四肢骨および頭骨等がランダムに入れられているようである。この厨子甕は、口径15cm、深さ35cm前後の非常に小型のタイプである。このタイプは、19世紀後半以降の火葬が始まったころのものと考えられる。つまり、本来火葬骨を納めるための厨子甕に、洗骨された骨をランダムに入れたということになり、散在していた骨を整理したものと考えられる。

墓３は先の墓１・２とは異なり、長さ約１～２ｍの石囲いの中に全身ではない頭骨・四肢骨が集められたものである。

これらの墓の時期であるが、先の厨子甕から19世紀後半以降の極めて新しい墓と言えよう。この岩陰周辺には少数の人骨片、厨子甕片が散在している。そこで、３基の墓の周辺、人骨散在部を１×１ｍの小規模なトレンチ５ヶ所を手掘により試掘したところ、すぐに地山・岩盤にあたり、さらに古い墓の存在は確認できなかった。この墓についての伝承・文献等は現状ではなく、小規模な試掘でも古い墓の痕跡は見つけられなかったが、この３基の墓の測量を中心とした発掘調査は必要である。

第３節　アブ遺跡（第６～８図）

石垣島ゴルフ場内９番ホールティーグランド北側ブッシュのアブ遺跡として従来周知されている場所は、標高30～40mの地点で、本来はやや小高い丘陵の先端部であったものと思われる。この地点を踏査した結果、高さ0.5～1.0mの低い石積・盛土が長さ５～10m程度に伸びるものを数ヶ所で確認した。石積は、高さ50cm前後で長さは未確認であるが５m以上のもので、地形が隆起している場所の際に拳大程度の礫が集められたような感じであった。

この場所において、手掘による試掘調査を14ヶ所で行った（第７図）。その結果、現状で石積・盛土も、ゴルフ場以前にあったと思われる畑に伴う耕作土であることを確認した。他の地点の多くは、地表から厚さ0.2～0.4m前後の表土もしくは耕作土があり、その下は明褐色土、石灰岩風化土とされるマージを確認した。

ただ、トレンチ17・26とした地点では、遺物包含層と考えられる黒褐色土を確認した。この地点は、岩盤が高さ0.1～0.3mで列状に露出している範囲である。ここの堆積は、0.05m前後の薄い表土の下に、厚さ0.2～0.4m程度の黒褐色土があり、この下にはすぐ岩盤が見られ、この土は岩盤の隙間にも入り込んでいた。この黒褐色土から、土器・陶磁器・貝類が出土した。特に、トレンチ17では１×２ｍの小規模な試掘にも関わらず、30cmのビニール袋一杯の遺物が出土した。

出土遺物であるが、白磁・褐釉陶器・土器・貝類があり、一部図化した（第８図・図版２）。３のみトレンチ24の表土からで、他は全てトレンチ17の黒褐色土から出土したものである。

１は白磁である。口径18.1cm、高さ5.2cm、底径9.1cm。削り出しにより作られた台形上の高台から体部は直線的に伸びる。釉は色調がやや青白色で鈍く、外面が体部中位まで掛けられ、内面見込みには蛇の目釉剥ぎが施されている。いわゆる薄手直口碗（金武1990）であり、石垣島ではフルスト原遺跡（石垣市教育委員会1984）等で見られる。

２は褐釉陶器である。壺の肩に当たる部分と思われる。外面には「清○」という刻印がされている。釉の発色は鈍い。

３は白磁の底部である。底径7.6cmである。釉は薄く透明な緑がかった青白色。高台は削り出しにより幅が広く、畳付は水平である。

４・５は土器の底部である。両者とも、平底で底端は丸みをもつが、体部は上方に比較的まっすぐ伸びるタイプである。色調も共に、外・断面が褐色、内面が黒色である。胎土は精良で、わずかに石灰質砂粒を含む程度であり、器面には気泡が見られる。５の器面はつるつるしている。底径は、４が19.4cm、５が径20.0cmである。これらの特徴から、中森式土器の体部が直口する深鉢の底部と思われる。

貝類は図化していないが、これもトレンチ17の黒褐色土から、５～10cm前後のシャコガイが５点、ヤコウガイの蓋が１点出土している。

上のような遺物から、遺物包含層と思われる黒褐色土は、おおよそ14・15世紀代（中森期の前半段階）と考えられる。ちなみに、この黒褐色土は、岩盤の上面を覆うだけではなく、その隙間にも入り込んでおり、フルスト原遺跡等の石積の基礎となっている岩盤に見られるような状況と類似している。すなわち、集落・屋敷地の石積みが存在した可能性も考えられる。しかしながら、この周辺にもいくつかの試掘を行ったが、

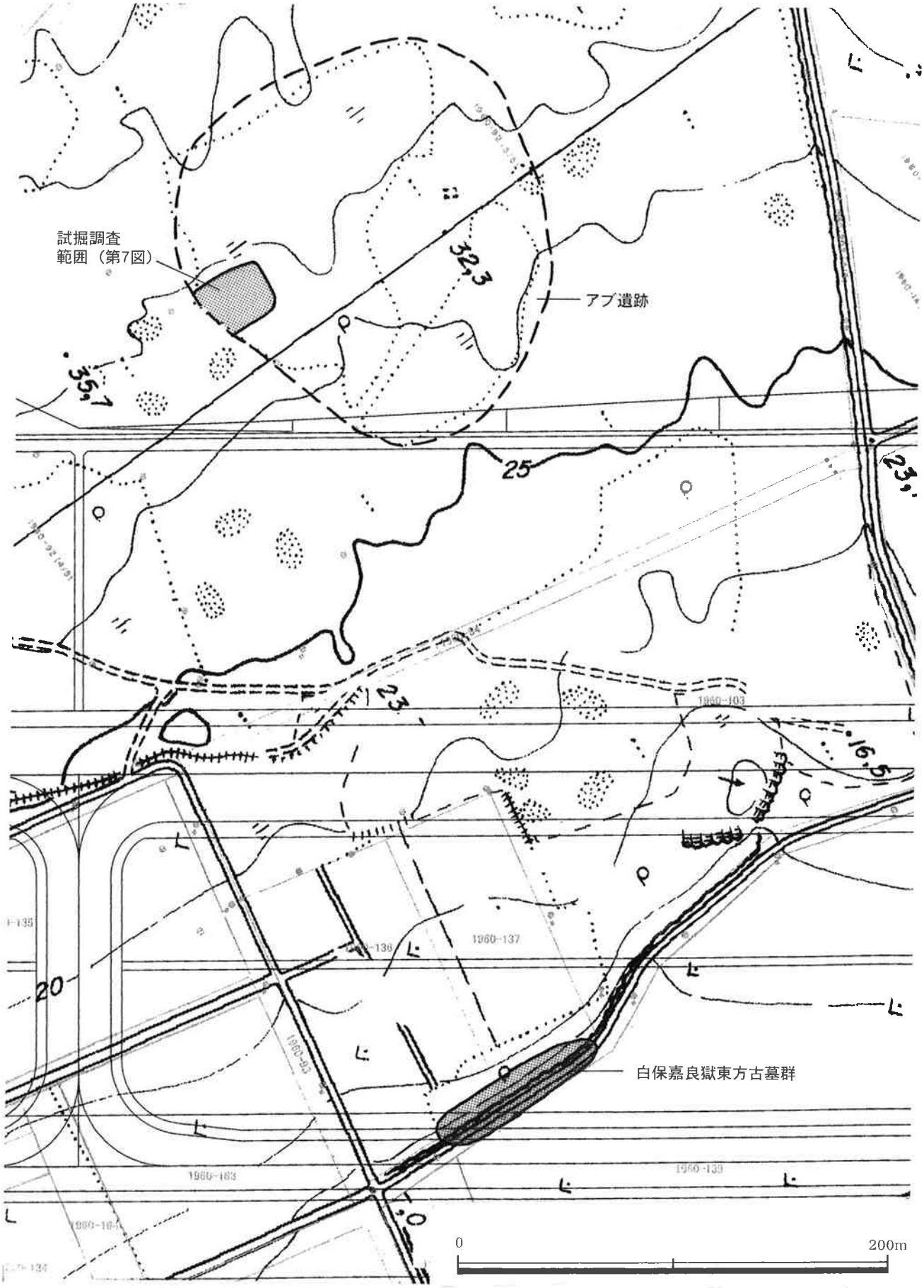
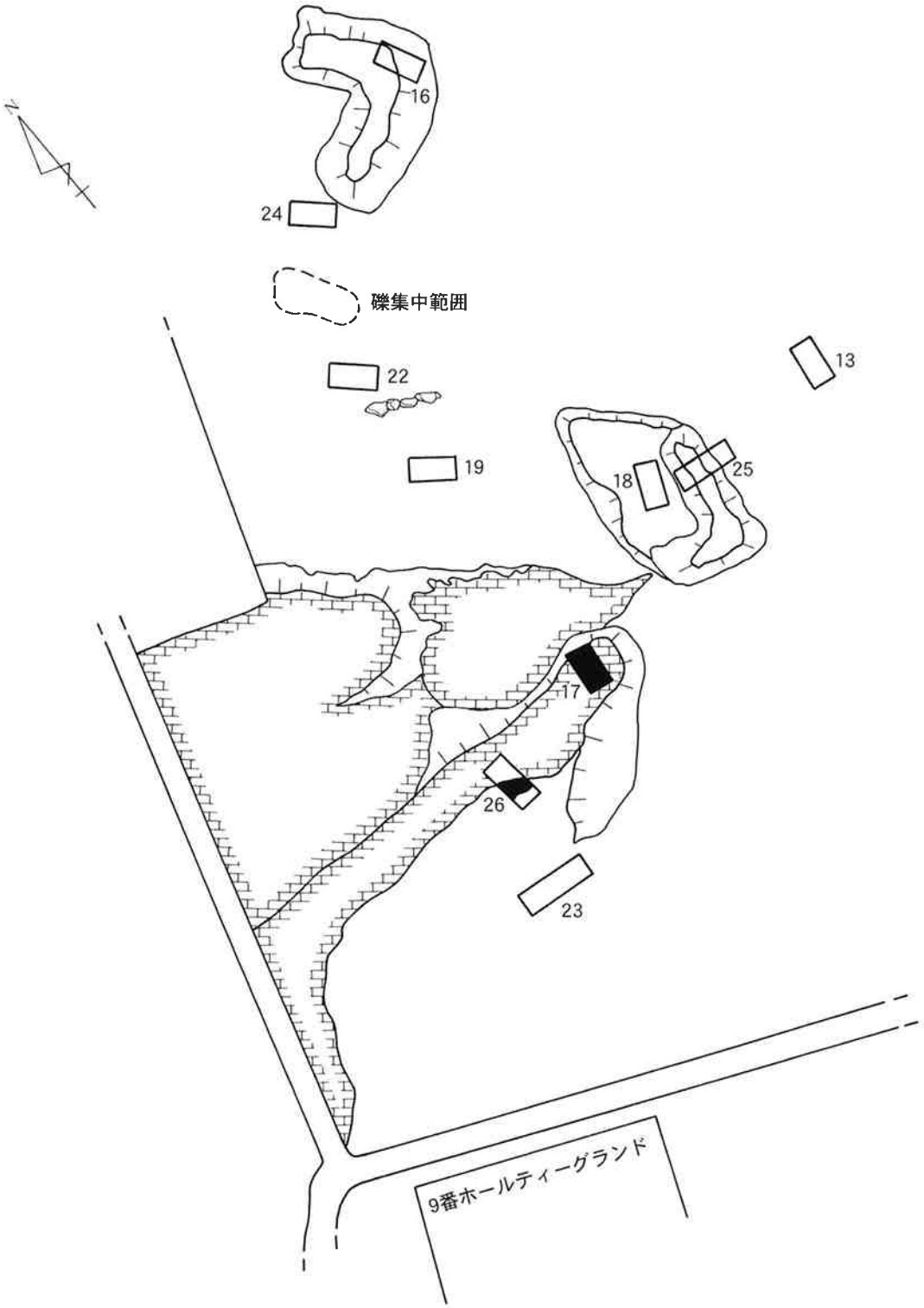


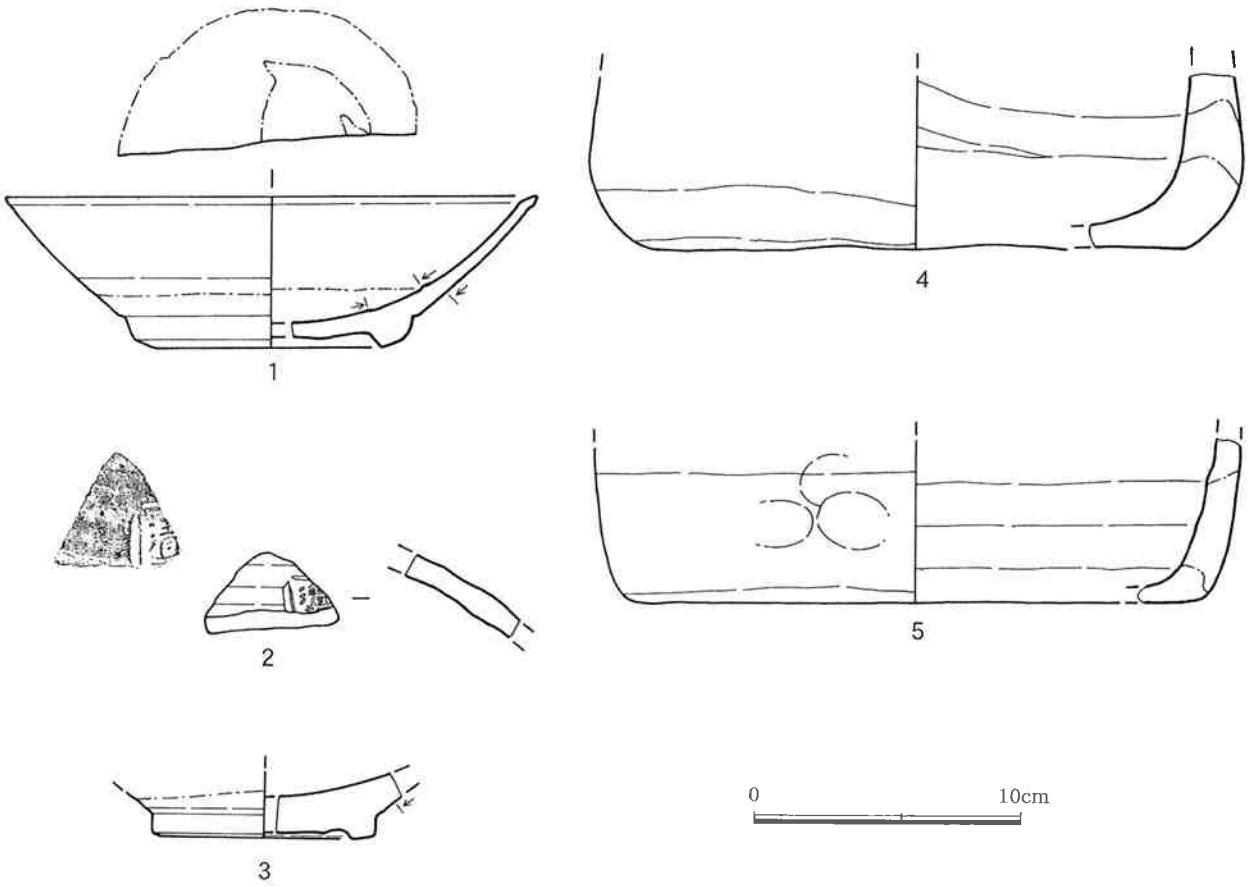
図6　アブ遺跡周辺（S=1/2,500）



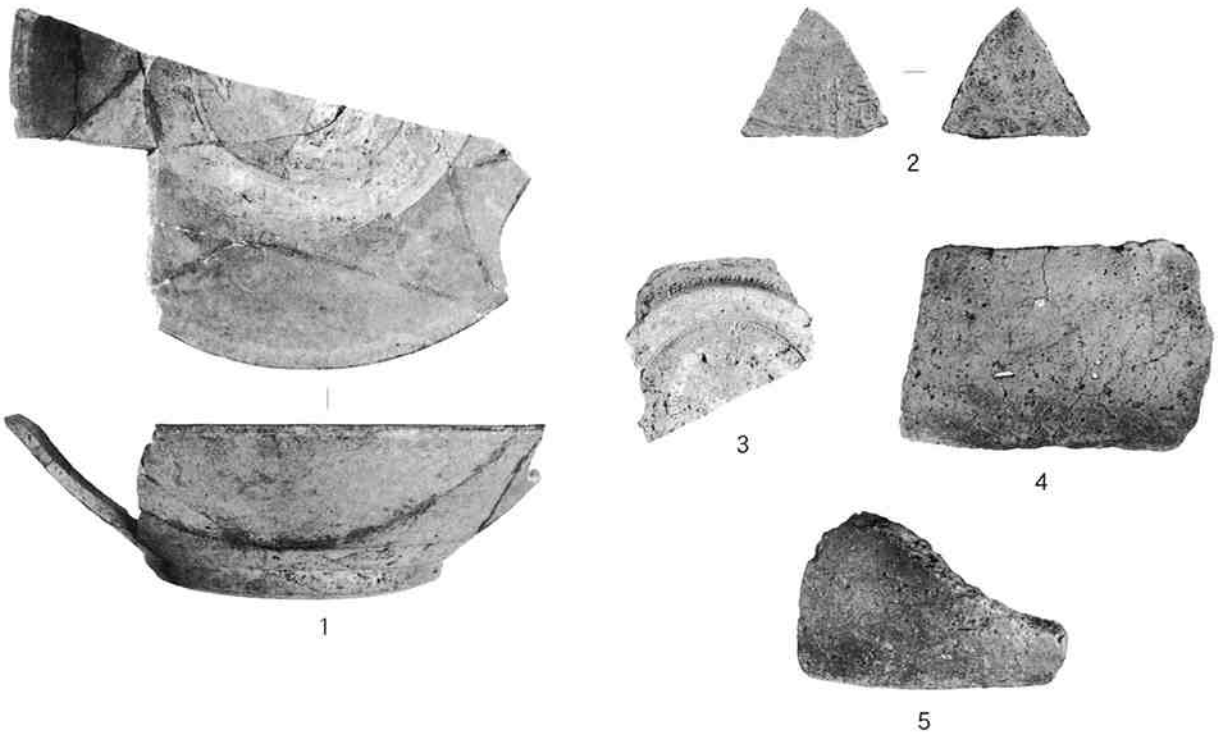
※1.数字は試掘トレンチのナンバーである。
※2.トレンチ17・26の黒ぬりは黒褐色土
（遺物包含層）の範囲。

0 20m

第７図　アブ遺跡試掘位置



第８図　アブ遺跡試掘出土遺物　白磁（1・3）、中国産褐釉陶器（2）、土器（4・5）



図版２　アブ遺跡試掘出土遺物

この遺物包含層と考えられる堆積土の・広がりは確認出来なかった。ただ、トレンチ19・24でも耕作土から同様の土器・褐釉陶器の小片が出土しているため、当該時期の集落が存在していた可能性が高い。

この範囲は、一応現状では予定地からは外れているが、かなり近接しているので、このあたりにおいて大規模な改変を行う場合には、建設側に注意を促す必要があり、気をつけなければならない。

第４節　盛山村落跡・盛山地区近世遺物散布地・盛山御嶽（第９図、図版３）

盛山村落跡は、盛山一帯に所在していた近世の集落跡である。残されている古地図等から、おおよその位置は推定でき、現況は畑地・牧草地となっている。この範囲の南半、特に国道390号線に近い辺りで18～19世紀の沖縄産陶器片が多く表採できる。

古地図（図版３）から推定できる盛山村落跡より約500m離れた北方の一帯の畑地・牧草地でも、同様の遺物が表採できる。そこで、この範囲を盛山地区近世遺物散布地と仮称した。この散布地も盛山村落跡との関係があるのかを確認するため、この範囲の一画である盛山西種子175－48で重機による試掘調査を行った。試掘調査は、この畑地において、４×４ｍのグリッドを４ヶ所設定した。その結果、どのグリッドも表土・耕作土を剥ぐと、地表下約0.5～1.2mの地点で岩盤を検出し、遺構・包含層の存在は確認できなかった。

盛山御嶽は現在ブッシュとなっており、近年人が立ち入った痕跡はなかった。このブッシュ内部を簡単に伐採したところ、石灰岩盤である高さ４ｍ前後の大きな巨石として露出しているのを確認した。また、１～２ｍ前後の巨石も数個確認できたが、これは岩盤ではなく、区画整理等で他所から動かされたものと考えられる。現状では、香炉等の人工遺物は確認できなかったが、本来はこの岩盤である巨石が拝みの対象となっていたのであろうか。

この盛山村落跡周辺は、既に区画整理が行われており、試掘調査の結果もそれを裏付けるものである。しかしながら、盛山御嶽の他に石組みの井戸も残されているため、盛山村落跡周辺で何らかの開発が及ぶ際には、確認のための試掘調査を再度行う必要がある。

第５節　カラ岳周辺

1989年度の調査では、カラ岳北東側の山麓部で３基の石積墓を確認している。しかしながら、山頂部は15～16世紀の遠見台と言われているが、その具体的な内容は判明していない。そこで、特に山頂部を中心に詳細な踏査を行った。その結果、この遠見台に関する遺構は、表面踏査では確認できなかった。ただ、山頂では４基の爆弾穴と思われる径約１～３ｍ程度の凹みを確認した。

第６節　石垣島ゴルフ場内洞穴および人工壕

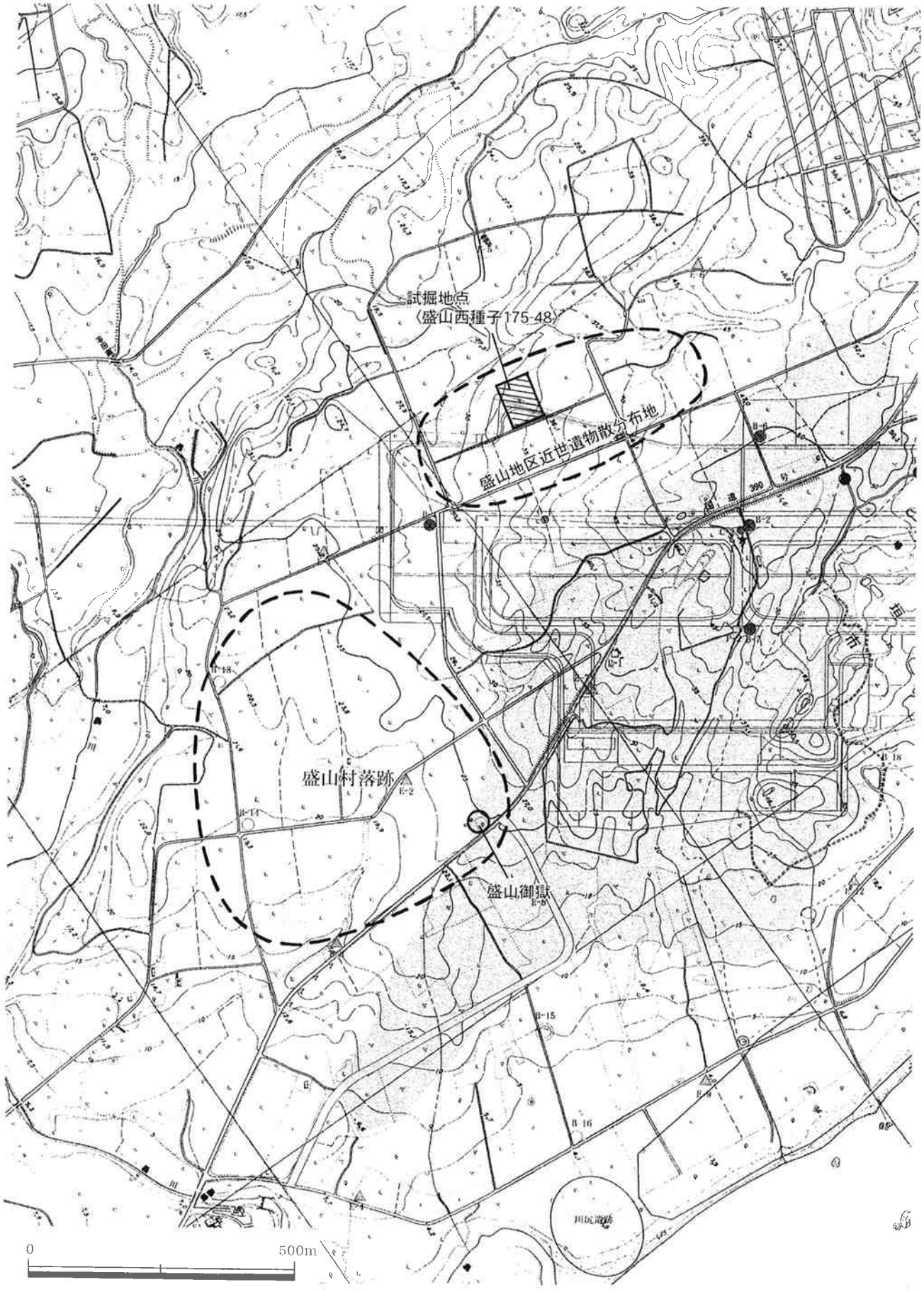
石垣島ゴルフ場においては、基本的にゴルフコースになっており、芝生が張られており、その一帯は造成されているものと思われる。ただ、このゴルフ場全ての範囲が芝生となっているのではなく、数ヶ所ブッシュのままに残されている部分がある。この場所において、先述したアブ遺跡や白保嘉良嶽東方古墓群の他に、３基の洞穴および２基の人工壕を確認した。

２番ホール西側洞穴は、長さ210m前後で、入口は高さ10mと広いが、内部は幅・高さ２ｍと狭く、大量の水流が見られる。内部に入ったが、明確な遺物は見られなかった。

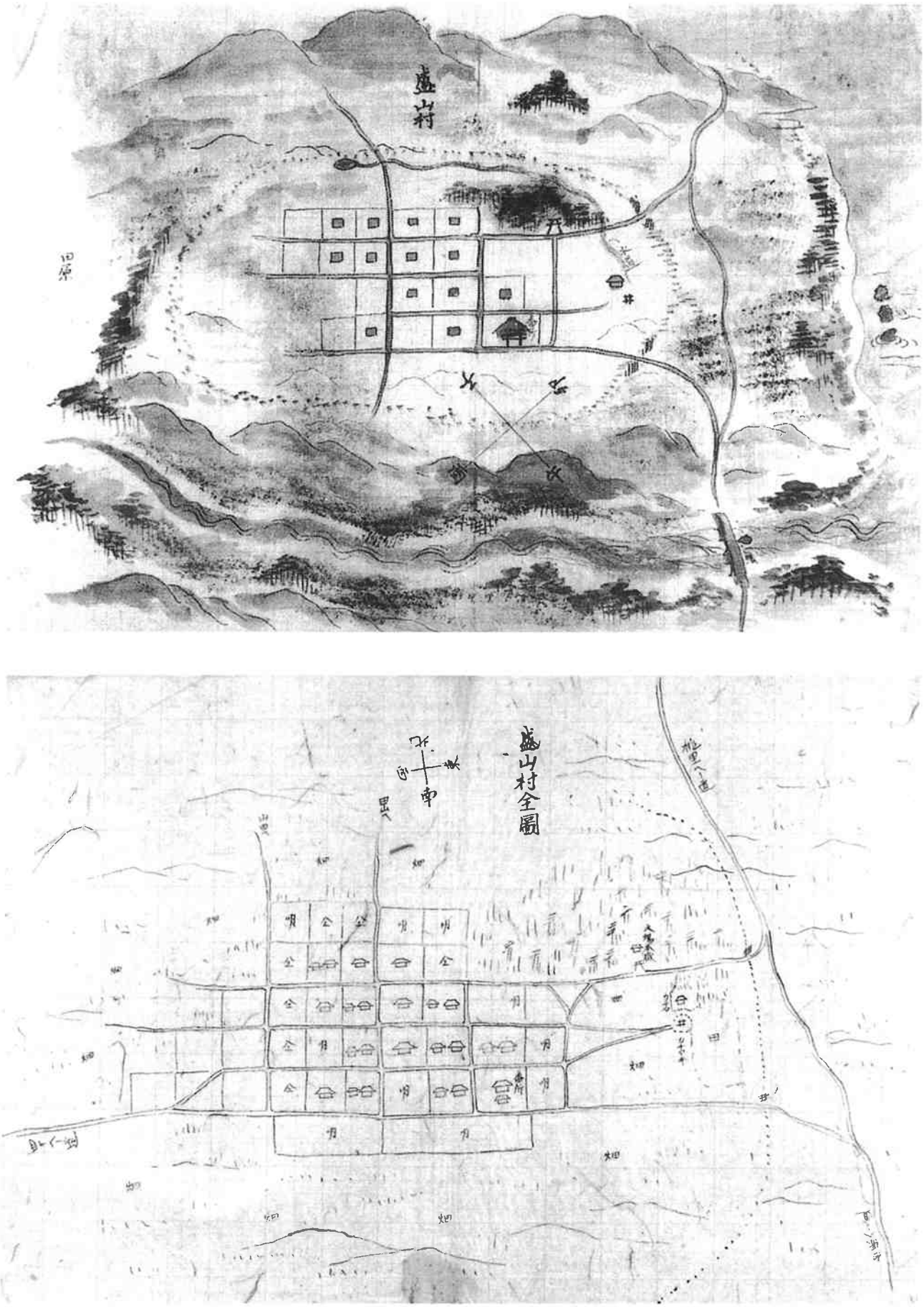
８番ホール東側洞穴は、長さ120m前後で、入口は高さ20m前後で、内部の幅20mと広い。入口付近にはウシやウマと思われる獣骨が多く散在していた。また、セメントブロック等は見られたが、明らかな先史時代の遺物はなかった。ここが、第二次大戦中の白保住民の避難壕と言われている（太田2000）。

９番ホール西側洞穴は、長さ20m前後、高さ５ｍ前後と小規模なものである。入口付近には沖縄産陶器片が散在しており、なんらかの拝所等の可能性は考えられる。しかしながら、獣骨は多く見られたが、人骨の散在はないので、墓であったという強い根拠はない。

16番ホール北側人工壕は、露出した岩盤の斜面に造られたもので、２基確認した。この人工壕はその壁面にダイナマイトを仕掛けた痕跡であるロト穴があったため、ダイナマイト爆破により構築されたものと思われる。規模は、１号壕が高さ1.8m、幅1.8m、奥行4.2m、２号壕が高さ1.1m、幅1.1m、奥行2.9mである。これらは岩盤をダイナマイトの爆破により構築されているので、第２次世界大戦期の日本軍の壕である可能性が高い。そのように考えると、その奥行の規模からは構築途中のものと思われる。



第９図　盛山村落跡周辺



図版３　盛山村絵図（社団法人温故学会許可済）

第４章　結語

今回の調査では、新石垣空港建設カラ岳陸上案の計画予定地内および周辺において表面踏査、試掘調査を行った。その結果として、従来から確認されていた嘉良嶽東貝塚、今回新規発見した白保嘉良嶽東方古墓群が現予定地内に位置し、緊急調査の必要があるものである。また、予定地外ではあるが、計画の変更、国道の付け替え等の周辺整備工事において、注意を促す必要があるものとして、アブ遺跡、盛山村落跡周辺が挙げられる。これらの遺跡を中心として、今回の調査成果をまとめることにする。

嘉良嶽東貝塚では、1989年度調査の範囲で確認された無土器期の遺物包含層が南側の空港予定地に及んでいるかどうかを確認するために２ヶ所の畑地（白保嘉良嶽1960－173･74番地）で試掘を行ったが、遺物包含層および遺構等は確認できなかった。すなわち、以前確認された同1960－175番地北側の畑地と、採砂工事が及んでいないと思われる海岸へ抜ける農道（同1960－174番地）に遺物包含層が残存していることになる。また、既に採砂工事が行われたが、同1960－175番地東側では、石垣市教育委員会の92年度調査により、同番地東側では新里村期（12～13世紀）の土器･陶磁器が出土する遺物包含層が確認されている。今回の調査でも、この時期の土器･類須恵器が表採できた。つまり、同1960－175番地北側の畑地と、同1960－174番地の農道の約3,000㎡の範囲には、無土器期もしくは新里村期の遺物包含層が及んでいる可能性が高く、記録保存調査を行う必要がある。

白保嘉良嶽東方古墓群は、石垣島ゴルフ場４番ホール東側ブッシュに併行する農道ぞいの岩陰で見られる３基の古墓である。２基については、厨子甕に骨が納められているが、元来納められていたものではなく、散在していた骨を整理しなおした可能性がある。今回の調査では、この付近で他の墓を確認することはできなかったが、この岩陰は長さ約50m程度続くので、周辺にも墓がある可能性がある。この古墓群については、周辺の岩陰に別の古墓がないかを確認することも含めて、測量を中心とした記録保存調査が必要である。

石垣島ゴルフ場９番ホールティーグランド北側ブッシュのアブ遺跡とされている範囲では、小規模な人力のみによる試掘の結果、14･15世紀代（中森期）の陶磁器･土器を包含する黒褐色土を２地点確認した。ただ、この周辺にもいくつかの試掘を行ったが、先の石積みが集落・屋敷の囲いとは断定できるような遺物・遺構の広がりは確認出来なかった。この範囲は、一応予定地からは外れているが、かなり近接しているので、このあたりにおいて大規模な改変を行う場合には、建設側に注意を促す必要があり、気をつけなければならない。

盛山村落跡は、1785年～1917年の近世・近代の集落跡であるが、絵図（図版３）に描かれた道等からおおよその位置は推定できており、この位置は空港予定地からは外れている。この一帯は、区画整理等で大きく土地改変がなされており、村跡の原状が残されていない可能性が高い。今回の調査でも、盛山村落跡からは北に500mほど離れている近世遺物散布地の盛山西種子175－48で試掘を行ったが、遺構及び遺物包含層は確認できなかった。また、盛山御嶽と言われているブッシュ内部でも簡易な伐採を行ったが、香炉等の人工遺物・遺構等は確認できなかった。

しかしながら、この盛山村落跡一帯に国道の付け替え等の開発工事が計画されるならば、確認のための試掘調査を行う必要がある。

これらの他、カラ岳山頂では爆弾穴と思われる凹みを確認し、石垣島ゴルフ場では３基の洞穴および16番ホール北側のブッシュで２基の掘削途中の人工壕も確認した。

いずれにせよ、新石垣空港建設予定地は、現在ゴルフ場および牧場、または区画整理が行われていたりするため、現状でもかなり旧地形が改変されているものと思われる。そのため、元来存在した遺跡が既に破壊されている可能性もあり、それほど濃密な遺跡分布は確認できなかった。しかしながら、特に石垣島ゴルフ場や牧場は削平だけでなく、大規模な盛土により造成されているので、今後の空港建設中に新たに未発見の遺跡が埋もれている場合があるため、建設側と密接な協議を繰り返しながら、空港建設計画を進めていく必要がある。

参考・引用文献

石垣市教育委員会　1984『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第７号
大田　静男　2000『八重山の戦争』シリーズ八重山に立つNo.1　南山舎
沖縄県教育委員会　1979『石垣島の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第22集
沖縄県教育委員会　1990『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ－八重山諸島の道－』
沖縄県教育委員会　1992「新石垣空港建設予定地内の遺跡分布調査」『新空港・空港拡張建設計画の予定地内の遺跡－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第106集
沖縄県教育委員会　1994『カイジ浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第115集
金武　正紀　1987「ビロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8　日本貿易陶磁研究会
金武　正紀　1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320　ニューサイエンス社
金武　正紀　1994「土器→無土器→土器　－八重山考古学編年試案－」『南島考古』第十四号　沖縄考古学会
牧野　　清　1990『八重山のお嶽』あーまん企画

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第23集

新石垣空港予定地内遺跡詳細分布調査

発　行　年　2004年（平成16）３月26日
発　　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903－0125　中頭郡西原町字上原193番地の７
Tel　098（835）8751・8752
印　　刷　株式会社アシスト
〒901－1111　沖縄県島尻郡南風原町字兼城577番地
Tel　098－889－6100（代表）

©沖縄県立埋蔵文化財センター　2004　Printed in japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

沖縄県立埋蔵文化財センター
平 16. 5. 12 成
210.0254
Ok50